

風土



左 義 長 や 婆 が 跨 ぎ て 火 の 終しまひ

(句集『竹取』より昭和三十六年作)

左義長はどんど焼きとも言われ、小正月の一月十五日に正月の神様を送る行事です。この火に当り、餅を焼き、書初めを燃やし、その灰を家の周囲に撒いて無病息災、家内安全を願います。また消えかかった火を跨ぐと皺がのび、長生きをすることも言われます。桂郎師は最後にひよいと跨いだ老婆を見逃しません。ユーモアの漂う、映画の一駒のような世界です

つ き す ぎ の 梅 に 鶯 遅 筆 かな

(句集『竹取』より昭和三十六年作)

七畳小屋にも春がきて、周りは梅の盛りです。しかし桂郎師の原稿は遅々として進みません。そんな折に鶯の声が聞こえるではありませんか。声のする方を見やると梅の花の枝からです。これではまるで、花札の「梅に鶯」ではありませんか。思わず「つきすぎだなあ」とつぶやいてしまいました。しばらく聴き惚れてしまい益々筆が進まなくなつたのです。

田や畑や動かぬものに雪つもる

(句集『能ヶ谷』より昭和五十六年作)

器師の句の世界は単一な構造の中に、はっとするような自然の真実を言い止めたものがあります。この句で言えば「動かぬもの」がそれに当たります。私たちは、「田や畑や動かぬもの」を提示され、初めて雪が積もるということは何かを思い知らされるのです。これは「動くもの」も動かなければ容赦なく雪に埋もれてしまうことを冷徹に知らせているのです。

百里来て花かたかごは秘中の秘

(句集『能ヶ谷』より昭和五十六年作)

「花かたかご」は山林の半日蔭、斜面に群生するユリ科の多年草です。三月、四月ごろ紅紫色の花をうつむかせて咲きます。その清楚で可憐な姿は乙女に喩えられます。器師はこの「花かたかご」に出逢えた喜びを「百里来て」と大仰にことばを置き、さらに「秘中の秘」と愛でるのです。まるで誰にも知られたくない恋人だけに贈ることばのようじ。

若狭の子

南うみを

身ぶるひの跡くつきりとうす氷

初蝶にがうがうと鳴る大櫓

滝壺に生木逆立つ雪解かな

実朝の濤に擲つ落椿

料峭の風やいつきに鳶を揚げ

堅雪の田をはすかひに若狭の子

金気水温む光琳模様なる

ハンガーのはみ出してゐる鴉の巢

雛に息かかるや面くらみけり

豆雛の尻押し合うて貝のうへ

補陀落を指す貝雛もあらむ

紅梅の明りに鯉のもみあへる



竹間集

同人作品



竹 秋 岩木 茂

臘梅のしづくの氷る坐禅堂
極楽念珠ゆつくり廻し冬終る
雪もろとも厄の薪の燃え上がる
汐汲浜水仙ひとつ流れ着く
煮凝や貧しさが生む詩一篇
竹秋のあまたの竹の曲りやう
波の端を踏んで霞の中にをり

かまくら 小林 輝子

かまくらを灯して座りまなこ閉づ
小かまくら千の燭鞆す磧風
星に日に語らひ乾ぶ凍大根
鴉なぜ啼くの生り木を責められて
除雪車のヘッドライトの獣めく
木々が雪振り払ふ音紀元節
雪形の鳥の羽搏きさうな朝

余生とは 田村すゝむ

春雪や書かねば言葉消え易し
千袋を脱いであなたに投函す
当日は現地集合梅真白
余生とは引き算ばかり燕来る
村ごとの甘藷刈倒す共同作業
島唄は三線とあり涅槃西風
寒緋桜真紅に染めて城の跡

雛飾る

田中佐知子

春雪のきらめき合格通知くる
夫婦箸選る雪解けの若狭かな
雪解けの肩寄せ合うて百仏
雛飾る調度の紐を結び直し
雨音か三代の雛飾り終へ
ぜんざいに丸餅二つ雛の日
子ら寝ねて雛ぼんぼりのほの明かり

猫 柳

柴田 久子

一村に投網掛けたるごと霞む
抱きゐる犬の心音春嵐
春筍の送られてくる友の逝く
亀鳴くや老の福耳地獄耳
雷門くぐりて針を納めけり
針山の針の長短納めけり
しろがねの風つつたつ猫柳

春シヨール

中村洋子

スタンドに子供を包む春シヨール
パレットへ早春の色並べをり
薄氷指先に突く登校子
海苔搔きや光の中に人動く
火のかたち風のかたちに野焼かな
山伏の法螺貝ひびく鬼やらひ
春寒し水の硬さに手を洗ふ

ひばり東風

橋添やよひ

野火猛る煙は人を呑み込んで
快晴の果てなる雪の大文字
ひばり東風石仏多き小野の里
枯蓮折れるしかなき氷室池
きさらぎの空に絵となる千年杉
野の宮は風音ばかり朧月
風ときて風と去りゆく雪女

山河集

同人作品



南うみを選

境内のひかり集めて針供養 石井 秀二

春一番川さかのぼる鷗かな
日脚伸ぶ道に鉢桶生花店
山路来て辛夷は遠く見る花か
抜け道の春泥避(よ)けてよろけをり

鉤爪の雲中菩薩春や春 下山田美江

かたばなの今も仏所の有り処かな
神木の高きこと蛇穴を出づ
百畳に千僧の経松の芯
房総の三浦の端や燕来る

巫の大きてのひら針供養 内藤 静

楸邨と波郷の対話水温む
芽吹きぬてかりそめならぬ木の齡

涅槃図の木の間の風に吹かれたし
早春の銀のナプキンリングかな

咲ききつて芯逞しきチューリップ 中嶋 陽子

春一番館パン買って両替し
啓蟄や座面の窪む森の椅子
裏紙は長き英文春灯

水温む犬のぞき込むベビーカー
源平池に波立ち騒ぐ春一番 川田 好子

川風に日向の匂ひ猫柳
納骨の読経流るる梅真白
大寒の日向拾ひてポストまで
縁日や筮竹鳴らす寒灯下

風土独語／南 うみを



神鶏の大地蹴散らし二月来る

上辻 蒼人

この「神鶏」は軍鶏でしようか。「大地蹴散らし」からの想像です。また「大地蹴散らし」は「二月」にも掛ります。「春」を使わず「二月」という寒さを伴った季語が句を引き締めています。

咲ききつて芯遅しきチューリップ

中嶋 陽子

「チューリップ」は多彩な色や明るさを詠むことが多いのですが、この句はその「芯」に注目しました。華やかな花びらを支えるのは遅い芯だということを「見つめる」ことで発見しました。

きさらぎの木の洞に棲む濤の音

内藤 静

「きさらぎ」は陰暦二月の異称。「寒さのために衣を更に重ね着る」の意味があり、寒さを感じる季語です。この木は磯の近くの大木でしょうか。洞に日がな、濤の音が籠ります。「濤」から荒々しい波も想像できます。

川風に日向の匂ひ猫柳

川田 好子

「猫柳」に素材としての「川風」は定番です。この定番を少しずらしたのが「日向の匂ひ」です。「猫柳」は早春ですが、このことばで日差しが温かくなり、保け始めた「猫柳」を想像します。

たんぽぽやレールは光跳ね返し

佐藤 恵子

この「たんぽぽ」は、あたりの地表が見えている頃の咲き初めのもので、日差しの中で「たんぽぽ」が点々と光り、その向こうにレールが銀色の光を「跳ね返し」ています。早春の明るい景がうまく捉えられました。(以下略)

境内のひかり集めて針供養

石井 秀一

「針供養」は二月八日に行われます。この句の眼目は「ひかり集めて」にあり、境内のあらゆる光が供養の針を耀かせているかのようにです。春の日差しが針を労っています。

蒲公英や日をつかみつつ子の歩み

片桐紀美子

「蒲公英」に「日差し」を取り合わせるのによくありますが、この句は「子」に焦点を当て成功しています。「日をつかみつつ」に、日差しの中でたどたどしくも力強く歩く幼児が見えます。

神木の高きこと蛇穴を出づ

下山田美江

「神木の高きこと」と「蛇穴を出づ」は直接の関係はありませんが、神社の石垣から蛇が出て来たと言われます。この句の面白さは、蛇が「神木」を仰いでいるように想像できることです。

投げ伸ばすじざ生地春はすぐそこに

鈴木 庸子

「投げ伸ばす」はじざ生地を広げる調理工程です。季節に関係はないのですが、職人の活発な動きと生地が伸び広がっていくのに、春への胎動を感じているのです。「動き」で成功しました。

風土集



南うみを選

かたかごや窯の里へと伸びる道

平塚

片桐紅美子

入彼岸開けたる堂の竜鳴かす
蒲公英や日をつかみつ子の歩み
薄氷に朝のひかりの挑みをり
遥かなる島引き寄せて春の潮
紙で切る指先春の寒さかな

川崎

鈴木庸子

女人講の揃ひ法被や針供養
建て売りの内覧会やクロッカス
投げ伸ばすピザ生地春はすぐそこに
なだめては閉める納屋の扉余寒かな
春隣日差しに白き艶生まる

五條

上辻蒼人

大試験春日の御符を子に送る
神鶏の大地蹴散らし二月来る
探梅やためらひ咲きに出合ひたる
神杉に日矢立ち上る二月尽

きさらぎの木の洞に棲む濤の音

川崎

内藤 静

杜深く日の差して来し薄氷
片栗の花飛びたくて飛びたくて
梅東風やご飯にのせて塩昆布
猫柳かもめの腹の幾つ過ぐ
たんぽぽやレールは光跳ね返し

横浜

佐藤 恵子

手にとれるにほひすみれの鉢軽く
紅椿そこだけ時の止まりけり
春塵やチケツト売り場の列長し
頬刺や鱗に潮の光留め
立春に届く一瓶搾りたて

逗子

高橋きこ子

箱に列なして目刺の送らるる
路の臺次の偶数まで探す
春泥の靴がいつぱい児童館
息止めて鶯餅の一口目